



Title	国学者「契沖」の形成：版本『百人一首改観抄』序文から
Author(s)	北田, 有佳
Citation	国語国文研究, 155, 30-41
Issue Date	2020-08-07
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89703
Type	article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_155_30-41.pdf



[Instructions for use](#)

国学者「契沖」の形成

—— 版本『百人一首改観抄』序文から ——

北 田 有 佳

はじめに

契沖は「国学の祖」として位置付けられ、その学問が享受、理解されてきた側面がある。例えば宣長が、「わが古学は、契沖はやくそのはしをひらけり¹」¹と言い、或いは国学の四大人に契沖が入ることがあるように、契沖と国学は連続的な関係で捉えられてきた。しかし、阿部秋生氏が、

国学者の源流をなす契沖は、その後来の真淵や宣長の先蹤として逆²にみる時にこそ国学者と云ひ得るであらうが、契沖その人はそんな事は考へてゐなかつた。彼自身は飽くまでも古典、古語の研究を好む阿闍梨と考へてゐたのである事は、自ら明記する数々の奥書にも明かであると思ふ。

と言うように、国学出現以前の契沖には、当然国学者であるという意識はなかつたはずである。

それではなぜ、宣長やそれ以降の国学者は、契沖を国学の先駆として認識したのか。従来の研究では、これを両者の学問の類似によつて解釈するだけで、それ以上の追求はなされなかつたように思う。そこで本論は、以上の問題を考えるために、契沖の著書『百人一首改観抄』（以下『改観抄』）の版本の特殊な成立に着目し、その内容を検討する。そして、契沖と国学が結び付けられる具体的な筋道について考えてみたい。

一、『百人一首改観抄』の写本と版本

『改観抄』は元禄五年（二六九二）に成立し、契沖の没後、延享五年（一七四八）に出版された。その刊行者は『近世畸人伝』（寛政二年（一七九〇）刊）の記述³から、樋口宗武と堀景山であると推定されている。

この『改観抄』は、延享五年の出版にあたって大きく改変された。

その改変内容は、写本跋文を敷衍した契沖序の作成、契沖説の省略、改変、追考の増補、歴史的仮名遣いから定家仮名遣いへの変更など多岐に及び、その程度の甚だしいことが先行研究により指摘されている。

このように版本『改観抄』には多くの問題が存在するが、本論で扱うのは「契沖撰」とされる「註百人一首序」（以下「版本序文」）である。この序文は、久松潜一氏により円珠庵本（自筆本）の跋文を改変して作られていることが指摘された。氏は版本序文と円珠庵本跋文の内容の類似を言い、契沖作の序跋を載せる「契沖遺稿」に円珠庵本跋文はあるが、「註百人一首序」は掲載されていないことから、版本序文を契沖のものではなく樋口宗武のものであるとした⁵。また、池田利夫氏はそれを受けて、円珠庵に残された「百人一首改観抄奥書」と題する自筆稿が、円珠庵本跋文と全く同文であることを紹介し、版本序文が円珠庵本跋文の改変であることを支持している。以上のことから、現在では、「註百人一首序」は円珠庵本跋文を改変して作られたと考えるのが一般的である。

ここで問題となる円珠庵本跋文と版本序文を比べてみよう。

〔円珠庵本』改観抄』跋文〕

(ア) 故人長流注三百人一首。草稿未闕身已乘^レ化七^三年于今矣。(イ) 余惜^二其不^レ遂^レ志忘^レ聞短^一統補^レ之。宛似^二石混^レ玉猶^レ糝^レ薫^レ唯恐^レ逝者有^レ未知^一却^レ皺^レ眉掉^レ頭。或曰。(ウ) 有^レ数^二家注^一行^レ世昭^レ晰^一。豈^レ非^二犀^一下

架^二屋^一乎。咨^レ茲^レ難^レ似^レ有^レ理。雖^レ然^一我^レ有^二一^一言^一。冀^レ頌^二子^一聽^一。故^レ人^一歎^レ下^レ諸^レ鈔^二多^二舛^一訛^一一^レ蔽^一。中^レ作^レ者^一幽^レ致^レ上^レ因^レ創^二此^一鈔^一。譬^二之^一修^二二^一大^一厦^一。有^レ下^レ欲^二二^一支^一持^一。却^レ令^二二^一欒^一斜^一。一^レ者^一上^レ子^一一^レ任^レ邪^一。有^レ下^レ救^二既^一將^二二^一顛^一仆^一。一^レ再^レ婦^二二^一牢^一固^一者^一上^レ子^一不^レ賞^レ之^レ邪。故^レ人^一婦^二二^一牢^一固^一者^一。層^一架^一之^レ比^レ不^レ稱^一也^一。還^レ焉。元^レ祿^二五^一年^一季^レ夏、契^一沖^一跋^一。

〔版本』改観抄』序文〕

註百人一首序

(ア) 子游長流生嘗注三百人一首。屬^レ藥^レ未^レ脱^一。溘^レ焉^一就^レ木。百人一首。是我^一〔平出改行〕王^一人所^レ詠^一和^一歌。而^レ藤^一黃^一門^一鑑^一定^レ焉。近^レ古^一名^一學^一家。(ウ) 各^一自^一詠^一調。世^一多^一鈔^一流。不^レ一^一而^レ足^一。靡^レ弗^レ二^一家^一一^レ習^一戶^一一^レ位^一。而^レ走^レ卒^レ兒^レ童^一。亦^レ能^レ背^レ誦^一一^レ焉。予^一素^一抱^レ二^一好^一レ^レ古^一之^レ癖^一。与^レ生^一同^レ病^一相^レ憐^一。(イ) 每^一悲^レ二^一生^一之^レ志^一業^一不^レ畢^一。輒^レ慨^レ然^一。妄^レ不^レ自^レ揆^一。為^レ二^一箋^一一^レ積^一。一^レ命^一以^レ二^一改^一觀^一。(エ) 雖^レ云^二三^一肯^一堂^一之^レ業^一。姑^一代^レ二^一其^一子^一。又^レ恐^レ屋^一下^レ架^レ屋^一。以^レ貽^二二^一大^一方^一之^レ誥^一也^一己。(オ) 夫^一和^一歌^一皆^レ我^一國^一語。而^レ國^一語^一亦^一自^一有^レ雅^一俗^一之^レ弁^一焉。有^二古今^一之^レ異^一焉。雅^一俗^一之^レ弁^一易^レ折^一。而^レ古^一今^一之^レ異^一難^レ識^一也。且^レ和

一 歌成^レ語^ハ。莫^レ非^ニ古^一。而^レ雅^者。故^レ自^レ非^ニ深^一。稽^ニ諸^一
 古^一。何^レ由^レ得^レ達^ニ。二^其辭^一乎。苟^レ欲^レ知^ニ古^一言^一。
 乃^レ万^一葉^一集^ニ足^一以^レ徵^ニ焉^一。予^レ夙^レ有^レ見^ニ乎^一。乃^レ遯^ニ其^一
 源^一於^レ万^一葉^一。尋^ニ其^一緒^一於^レ万^一葉^一。久^一之^レ古^一今^一之^レ異^一。瞭^然於^レ
 心目^一之間^一。而^レ凡^一國^一朝^一典^一籍^一。古^一言^一難^レ通^一。亦^多所^レ建^一
 明^一。未^嘗不^ニ左^一右^一遇^ニ其^一源^一也。此^一編^一之^レ言^一。所^レ以^レ与^ニ衆^一說^一舛^一
 馳^一上^一者^一。亦^レ唯^レ万^一葉^一集^ニ足^一以^レ徵^ニ焉^一。舉^レ之^レ予^一稽^レ古^一之^レ
 力^一。而^不敢^レ復^レ執^レ臆^一見^一者^一也。後^レ之^レ君^一子^一尚^レ或^レ買^ニ予^一余^一
 勇^一。乃^有二^以是^一正^一焉^一爾。元^一祿^一五^一年^一壬^一申^一季^一夏^一撰^一江^一高^一津^一沙^一門^一
 契^一沖^一撰

版本『改観抄』の序文は、円珠庵本『改観抄』の跋文の倍近くに及ぶ。その破線部を比べてみると、(イ)の内容はほとんど同じく、(エ)の内容は「肯堂之業」の譬えが追加されているがそれ以外は変わらない。また(ウ)の内容は、版本の方がより具体的に表現されているが、言うところの趣旨は変わらない。このように(ア)(イ)(ウ)(エ)には、それぞれ表現が異なる部分があり、かつ内容が大仰になっているものもあるが、おおよその対応関係を見ることが出来る。

しかし一方で、その後半部の内容を検討してみると、記述態度に差が見られる。例えば、円珠庵本跋文が、「故人婦^ニ牢固^一者^一。」と

いった、諸抄の誤りを正した功績を長流のものとしたのに対し、版本序文では「^一舉^レ之^レ予^一稽^レ古^一之^レ力^一。」といったその功績を契沖自身に帰している。このように、版本では円珠庵本の主張とは違って、注釈の功績を契沖のものとして扱っているのである。また、自身の著書『改観抄』については、円珠庵本では「宛似^ニ石混^一玉^一猶^一糝^一薫^一唯恐^一逝^一者^一有^レ知^レ却^レ皺^レ肩^一掉^レ頭^一。」とその内容を謙遜していたのに対し、版本では「^一舉^レ之^レ予^一稽^レ古^一之^レ力^一。而^不敢^レ復^レ執^レ臆^一見^一者^一也。後^レ之^レ君子^一尚^レ或^レ買^ニ予^一余^一勇^一。乃^有二^以是^一正^一焉^一爾。」とその内容を得意げに語っている。このように、円珠庵本と版本とは自説に対する態度が全く異なり、同じ契沖の手により、しかも同じ元祿五年季夏に書かれたものとは考えられないのである。

以上より、先行研究の指摘通り、版本序文はその内容の面においても別質のものと思なせ、後人により作られた可能性が高いといえる。

二、版本序文の問題点

さて、この版本序文には、先行研究の指摘とは別の大きな問題が存在している。それは(オ)「夫和^一歌^一皆^一我^一国^一語^一……亦^レ唯^レ万^一葉^一集^ニ足^一以^レ徵^ニ焉^一。」という部分にある。

この内容は円珠庵本跋文になく、しかも『百人一首』について述べている訳でもない。つまりここには契沖からも『百人一首』からも離れた、独自の内容が語られているのである。では、その内容を確認していこう。

(オ)は、まず初めに和歌とは何かを定義する。これによれば、和歌とは日本の言葉である(夫和歌皆我国語)。そして、この日本の言葉には、自然に雅と俗の区別があり(而国語亦自有雅俗之弁焉)、かつ古と今の違いがある(有古今之異焉)。ここにいう雅と俗の区別はしやすいが(雅俗之弁易折)、古と今の違いは知りたくない(而古今之異難識也)。ここで再度和歌について考えると、和歌の語を成すものは、古であつて、かつ必ず雅である(且和歌成語。莫非古而雅者)。

版本序文は、このように和歌を定義し、ついでその意味を知る方法を次のように説く。和歌は古で、かつ雅であるから、古の様々な物事を深く考へて学ばなければ、その意味を知ることとはできない(故自非深稽諸古。何由得達其辞乎)。そして、もし古言の意味を知りたいと思ふならば、『万葉集』でもつてその証拠とするに足りる(苟欲知古言。乃万葉集足以徵焉)。そして、版本序文は、その例証として自分(契沖)の学びを振り返る。自分は早くから『万葉集』でもつて古言を理解できるといふ見識を得た(予夙有見于此)。そこで、言葉の始まりを『万葉集』まで遡り(乃遡其源於万葉)、その端緒を『万葉集』に求めることで(尋其緒於万葉)、久しくして、古今の違いをはっきりと心に悟つた(久之古今之異。瞭然于心目之間)。そして、ほとんどの日本の典籍の古言について、不分明な所を明らかにすることが多く(而凡国朝典一籍。古言難通。亦多所建明)、いまだかつて、左右全ての言葉について、『万葉集』にその源を見出さなかつた(未嘗不左右遇其源也)。

そして以上の事から、この版本の注釈でも、多くの人の支持する説とは異なる説を述べるにあたっては、ただ『万葉集』でもつてその証拠とするに足りる(此一編之言。所以与衆說舛馳上者。亦唯万葉集足以徵焉)と主張するのである。

以上の言説は、要するに次のような論理である。和歌は古でかつ雅であるから、その意味を理解するには、深く古のこととして考えなければならぬ。そして古の言葉の意味を理解するために、深く古のこととして考える方法とは、すなわち、『万葉集』に証拠を求めることである。このように『万葉集』に根拠を求めれば、日本のいかなる典籍の言葉も明らかになる。だから、『百人一首』において異説を述べるにも、『万葉集』を証拠とすることで足りる。つまり、版本序文は『万葉集』さえ分かれば、後の典籍である『百人一首』は当然理解できるといふのである。

この版本序文を、久松氏は契沖の見解を敷衍したものだとして、序文作者が契沖の考えを代弁しただけであるとする。氏は「百人一首改観抄序に『苟欲知古言、乃万葉集足以徵焉』(但しこの序は契沖の自作のまゝ、ではないかも知れないが、契沖の見解を明かに語つてゐる)と言つてゐる」とし、以降の先行研究も、後人の手になるものであれ契沖の見解に基づくものであると考へているようである。確かに『万葉代匠記』(精撰本)には「此書ヲ証スルニハ、此書ヨリ先ノ書ヲ以スペシ」(物釈雑説)とある。これを敷衍していけば、どんな書を読むにも、ほとんどの書に先んじて成立した『万葉集』だけを見れば、証拠として十分であるという考へ方も可能である。

しかし、前述の通り、この言説は円珠庵本跋文を敷衍しただけで

は出てこないはずである。また、話の内容も『万葉集』によって古言を理解する方法の有効性を説いただけだから、『百人一首』の説明としても不十分である。故に、円珠庵本跋文のみによって、版本序文の内容が成立したと考えるならば、その内容は敷衍ではなく飛躍であると言える。

また仮に、これを敷衍として捉えるならば、序文作者は『改観抄』以外の契沖、つまり他の契沖注釈や言説を版本序文に持ち込み、それを敷衍したのだと考えられる。この場合、版本序文の内容に即すと、契沖は『万葉集』研究の時点で版本序文の方法に至っているから、その敷衍は契沖の代表的著書『万葉代匠記』の方法を取り入れるような形で行われたと想定される。しかし『万葉代匠記』の方法にしても、例えば先に引用した「此書ヲ証スルニハ、此書ヨリ先ノ書ヲ以スベシ」というのは、『万葉集』（此書）を証するには、『日本書紀』などの書（先ノ書）を以てするべきだということであって、『万葉集』を見れば後世全ての書物を理解できるといふ版本とは、考え方が異なるのである。

さらに、ここで注意したいのは、契沖の他の業績、『万葉集』研究の業績が、序文作者により『改観抄』に持ち込まれていることである。しかも、序文作者は、契沖の研究を全体として見て、その中でも特に『万葉集』研究を評価していると考えられるのである。それは、版本序文が契沖自身の学びの原点に『万葉集』を置き、その見識により、以降の日本の典籍、つまり『百人一首』を含む契沖のほとんどの研究対象を容易に理解できたことからも窺うことができる。すると、版本序文の内容は、序文作者が契沖の業績全体を

総合評価した上に成立していると推測できるのである。

以上を踏まえると、序文に見た考え方を契沖自身の見解の代弁であるとみることが難しい。むしろ、序文作者による契沖業績の評価が前提にあると考えれば、版本序文に現れる契沖の思考は、序文作者が評価・理解した契沖の思考であると考えられるのである。そして言うまでもないが、版本序文に述べられるこの考えは、読者には全て契沖のものと思なされることになる。

それでは、序文作者が抱いたこの考えは一体どこから生まれたのか。

先に言及したが、円珠庵本そのものは、跋文にもその本文にも版本序文のようなことを言っていないため、その淵源となることは難しい。また仮に「此書ヲ証スルニハ、此書ヨリ先ノ書ヲ以スベシ」から敷衍するにしても、注釈する書物より先の書物を見るべき、という契沖を、『万葉集』だけを見ればいい、と言っているときまで解釈するにはかなりの飛躍がある。このように、二つの間にはかなりの質的な差異が存在するのだから、この序文の作成を、単に序文作者の敷衍ないし想像力でもって説明することは難しい。すると、ここには別の要因を考える必要がある。

筆者はこの要因を、契沖の思考に似た別の方法に影響・混同されたことによるものだと考えている。そして、その影響・混同された方法というのが、荷田春満周辺に存在していたものであると推測するのである。

三、版本序文と荷田春満

そもそも、先に見たような古語理解の方法は、中世までの注釈が祖述と敷衍を繰り返して、原典の真意からかけ離れた理解となつていった状況を問題視したことから起こつたものである。その思潮の初期に位置付けられるのが、契沖の学問や伊藤仁斎の古学（古義学）である。版本『改観抄』の刊行された時代、これら思潮は既に盛んではあったが、それでもまだ新しい学問の方法であつた。であるから、契沖に似た古語理解の方法を説き、かつ周囲への影響力を持つた人物に限られると考えられる。

さて、ここで版本序文の文章に注目してみると、特徴的な表現が見られる。それは「瞭然于心目之間」という表現である。これについて、「瞭然」が「昭昭」であるものは仏教典籍を中心に散見されるが、「瞭然」「心目之間」の両方を用いる表現は仏教典籍にも日本の古典文学にも見られない。実は、この表現が多く見られるのは漢籍で、特に朱子学関連の書に多く登場する。また日本でこの表現が見られるのは、管見の限り、伊藤仁斎『語孟字義』と荻生徂徠『訳文筌蹄』のみである。以上を踏まえると、「瞭然于心目之間」という表現は、儒学者の文化圏に使用された表現の可能性が高い。すると、版本序文に影響するものとして、近世儒学の存在を見逃したまま、検討はできない。

そもそも荷田春満の学問の方法に至るまでには、伊藤仁斎の古学（古義学）による影響があつた。伊藤仁斎の古学は当時の京都でか

なり広まっており、同じく京都にいた樋口宗武・堀景山もその影響を受ける環境にいた。つまり可能性としては、版本序文作者が伊藤仁斎の古学から直接影響を受けて、版本序文の方法が生まれたことも考えられるのである。

しかし、伊藤仁斎の方法の対象はあくまで漢籍であつた。であるから、伊藤仁斎の方法を版本序文に反映させるためには、序文作者が漢籍の話を和歌に応用するという段階を踏まなければならない。そこで、伊藤仁斎の方法よりも、版本序文に見られる方法に近似したものととして、春満周辺の方法を取り上げたい。

荷田春満（一六六九—一七三六）の著作の多くは草稿や書人などの形で残っており、完全な稿本として残っているものは少ない。その中で、荷田春満の歌字を窺えるものとしては、『万葉集童子問』と『伊勢物語童子問』が挙げられる。どちらも在郷晩年期（享保八年（一七二三）—元文元年（一七三六））のもので、それぞれが『万葉集』『伊勢物語』に対する「童子問（童子からの質問）」と「答（荷田春満の答え）」が繰り返される形式で記される。¹³

さて、『万葉集童子問』では、古語理解の方法について具体的にこう述べる。

石に八九きもあり方も有て必しも角おほしといふべからず。僻案の義有。是も日本紀の歌の童子問に答へたれば此集にてはいはず。万葉集ハ末なり。日本紀ハ本也。本に明らかなれば末おのづからまどはず。後世の学者皆本をしらずして末を論ずる故に、本にたがへば事明らかならず。よりて万葉集を明らかにせんにハ、古事記日本紀の歌を明かにして後万葉集にわたるべし。

万葉集明らめて後古今集を見れば疑なきを、後人ハ古今集を伝授を得ざれば歌学の本明かならざるやうに心得て万葉集をもみず。況や日本紀古事紀の歌には目をわたす事もなきをや。よりて万葉集の難義とする冠辭等日本紀古事記等にみたるハ此集の間に答へず。日本紀古事記等の童子間に答ぬ。

(二六—二七頁)¹⁴

これは、「つ」のさはふ(万葉・一三五)についての問答である。ここで荷田春満は傍線部のことを述べる。それによれば、『日本書紀』や『古事記』の歌を明らかにすれば、『万葉集』の歌が明らかになり、また、『万葉集』の歌を明らかにすれば、『古今和歌集』の歌も明らかにできると言う。春満は、『日本書紀』・『古事記』(歌)↓『万葉集』↓『古今和歌集』という流れを本↓末という流れで捉え、本が分かれば末はおのずと明らかにでき、つまり『万葉集』を明らかにするには、その「本」である『日本書紀』や『古事記』の歌を、『古今和歌集』を明らかにするには、その「本」である『万葉集』を理解しなければならぬと考えたのである。この考え方は版本序文が、「古言」を知りたいならば、その「源」を『万葉集』に遡り(遡其源於万葉)、その「緒」を『万葉集』に求める(尋其緒於万葉)と言ったことと一致する。版本『改観抄』のいう「源」「緒」が意味するところは、春満のいう「本」と変わらない。

また、ほとんどの日本の典籍の「古言」について、理解したいものも明らかにすることが多い(而凡国朝典籍。古言難通亦多)所建明)というのも、春満が「万葉集明らめて後古今集を見れば疑なき」ということに対応する。このように、版本序文の主張

には、荷田春満の主張と同質のものを認められるのである。

ただし、ここには問題が残る。それは、『万葉集』の「本」として位置付けられる『日本書紀』・『古事記』の歌の存在である。春満の古語を理解する方法では、その「本」が『日本書紀』・『古事記』の歌に設定される。その考えは他の『万葉集童子問』の記述でも、「此集の文字訓読日本紀を本としてかければ、日本紀を見ぬ人万葉集の文字をよむべからず」(二四—二五頁)というところから窺える。一方で、版本序文は「苟欲知古言。乃万葉集足_レ以_レ徴焉。」として、「古言」の典拠はあくまで『万葉集』で足りるとするのであって、それ以上に遡って考えるべきだとは言わないのである。ここに、版本序文と春満の考えとの間に相違が存在する。しかし、これは『伊勢物語童子問』の記述を重ねてみると状況は変化する。その記事を引用しよう。

とへばいふとある詞を、とへばうるさしといふの略詞といはゞ、闕疑抄の説しかるべし。しかれども、とへばいふとよみて、とへばうるさしといふとは解しがたく、詞たらざる也。(中略)しからは、いづれの字にあやまりたるやとうたがふべし。それは万葉集をしらざる人にはかたりがたし。万葉集を見しりたる人は予が言をまたずして正字をしるべし。しまがくれの嶋の字もおなじ。学問の為に今いはず。万葉集問の時その証をあらはずべし。すべて後世の歌学は万葉集をしらざる故に、古詞をしらざ古訓をしらざる故に、かたりがたし。汝万葉集をまなびて古今集の疑もはれ、此物語の歌の詞も明かなるべし。只、歌学の源は万葉集に過べからず。万葉集の源は古事記日本紀の歌也。

かなのたがひ訓の誤り皆、古事記日本紀万葉集等をみてしるべし。よりてしばらく此五文字の誤字をいはず。いはざるは汝に学問をすゝむる也。すべて学問は本を明にして末をしるべし。末をとりにて本をはかるべからず。

(五二—五三頁)¹⁵

ここでは、『伊勢物語』第十三段の「とへばいふ」という歌の解釈について、「とへばいふ」を「とへばうるさし」という意味には解せないとして、この歌の初句「とへばいふ」は誤字・誤訓によるものであると主張する。その元の言葉については、「学問の為に今は「ず」として答えを出さないが、注目すべきはそれに続いて『万葉集』を学ぶ必要性を説く部分である（傍線部）。これによれば、『万葉集』の源は『古事記』・『日本書紀』の歌であるけれども、『万葉集』より後の歌の学問の本源は『万葉集』にあるという。

ここで版本のいう「苟欲知古言。乃万葉集足以徴焉」の「古言」について考えると、「和歌成語。莫非古而雅者」。故自「非深稽諸古」。何由得達其辞乎。」を受けての「古言」であるから、主として和歌の言葉を対象としていることが分かる。つまり、版本序文の主張は、『百人一首』などの和歌の言葉を知りたければ『万葉集』でもって証拠とするに足りるということであり、これは『伊勢物語童子問』における考え方と一致するのである。

四、版本序文と賀茂真淵

また、荷田春満の門人である賀茂真淵は、版本『改観抄』出版以

前の著書『百人一首古説』（寛保三年（一七四三）頃成）（以下「古説」）の天智天皇「秋の田の」において、以下のように言う。

此等ぞ実に此天皇皇太子の時の御歌にして、上古のすがた也、此御製よりみれば、万葉に、秋田刈かりほをの作りといふハ、後の風也、それより秋の田のと有をミれば、又はるかに後にて、弘仁已下の詞也、凡日本記・万葉集ハよろづのもの、もと、も証徴ともするに、それに対して考れば、秋の田の歌ハ、天智天皇の御製ならぬ事、明らか也、

(二四〇頁)¹⁶

これは、天智天皇「秋の田の」が後世の作であることを論じる部分である。真淵はこの文章の終わりでも、「日本書紀」と『万葉集』が全てのものの「本」とも「証拠」ともなるのだという（傍線部）。ここでは、簡略ではあるが、先ほどの春満と同質の考え方が述べられている。つまり、春満の方法は真淵にも共有されていたということである。すると、この考え方は春満の中にもしかない独特の考え方というよりは、ある一定の範囲内で共有された方法だと考えられる。そしてその範囲としては、春満とその門人たちの周辺が想定されるのである。

以上、春満の『万葉集童子問』や『伊勢物語童子問』では、「古今和歌集」や『伊勢物語』などの後世の和歌を理解するには、その「本」や「源」となる『万葉集』を理解すべきであるという方法があることを確認した。そしてこの方法が、版本序文の、『百人一首』などの和歌の言葉を理解するには、その「源」「緒」である『万葉集』を証拠とすれば良いという考え方とかなり近似することが分かった。また「古説」の文言から、この方法が春満に留まらずその門人の真淵

にまで影響していることが理解され、春満やその門人たちの周辺においてある程度共有された方法であったことが想定された。

なお、版本においては、歌人・和歌注の改変においても、春満やその門人たち、特に真淵の『古説』の影響を受けたと思しき部分が見られる。

例えば、円珠庵本に存在した一〇〇首の配列に関する記述を、版本『改観抄』では、

一 此書草稿のとき沖師の注記の手よりもれて世に伝ふる書写の本あり。乖謬すくならず。二をいはは、百人一首一人の歌に列立をいひ、能因法師の歌に三室山の地理をことはり、三条院御製秋の月の歌とする等の説、今ことごとく削さる。

(凡例)

として削除する。一方、『古説』の順徳院「もしきや」末尾に以下のような記述がある。

皇考後鳥羽院、雲編三紀皇妣修明門院贈左大臣範季公女、子聖号修明門院、(中略)、又或説に、此歌の編次を論ずるなどハ、いとくわろし、古今集にこそ専らいはめ、古説卷五終、

一〇〇首の配列に言及する注釈は、他の『百人一首』注釈にはあまり見られない。そのため、配列への言及は円珠庵本『改観抄』の特徴の一つとされている。『古説』は本文中において、契沖の名前を挙げて『改観抄』説に言及することが多いことから、ここに言われる『或説』は契沖説であると考えられる。つまり、『古説』で否定された円珠庵本の説が、版本でも否定され削除されたということになる。

また版本は、安倍仲麿「あまのはら」において『古今和歌集』左注の引用を『土佐日記』一月二十日条に差しかえる。しかし版本はその引用の後で、「舟にのるべき処、古今集左注には明州といふ所といへり」と言い、削除したはずの『古今和歌集』左注に言及し、円珠庵本にない言説を加えている。すると、版本作者は『古今和歌集』左注を引用した方が都合の良い部分を、わざわざ『土佐日記』一月二十日条に差しかえたことになるが、その理由は判然としない。しかし、『古説』の同和歌注の、

古今集の左注の文は、土佐日記によりて、後人の書たるものなるべけれバ、こゝに略せり、「中略」此左注すべていと後の人の、しかも物よくしらぬ人の書たる事序より、歌かけて四十が条ばかりの誤り侍り、故に、さりし比、金吾君へ奉れる左注論二巻あり、披見して知べし、ふつに左注ハとるべからず、

(二五九頁)

という指摘を受けたものと見れば説明がつくのである。

このように、版本には『古説』の否定を反映したと思しい記述が確認できる。そもそも、写本成立から版本刊行までの間で『改観抄』の説を引用した百人一首注釈書は少ない。その中で、『古説』が『改観抄』を批判した部分が訂正されていることを考えると、『古説』による指摘は、版本『改観抄』の改変と無縁とは言えなさそうである。すると、版本『改観抄』作者は『古説』をはじめとする荷田春満・賀茂真淵周辺の考えに触れられる環境にいたと言う事ができるだろう。

以上、版本序文の本文検討と、他の学問との関わりの検討によって、版本序文が作成される過程で、春満やその門人たちの古語の理解方法の影響があった可能性が高いことが確認された。この影響が序文作者の意識的な改変であるか、それとも無意識的な混同であるのかは判然としない。しかしその結果として、版本序文に見られる契沖の思考は、春満や真淵の発想の枠組みに当てはめられる形で語られることとなった。そして、版本序文における契沖は、春満やその門人たちと同様の方法を「元禄五年季夏」時点で提唱することとなった。つまり、版本序文を全く契沖のものとして捉えるならば、春満・真淵が契沖の方法を継承したこととなる。それは契沖という人物を、春満・真淵周辺に共有される方法の先駆、ひいては国学の先駆として描くこととなったのではないだろうか。

おわりに

さて、『改観抄』について言及した記述として、本居宣長の『玉勝間』¹⁸「おのが物まなびの有しやう」に有名な話がある。引用すると以下の通りである。

さて京に在しほどに、百人一首の改観抄を、人にかりて見て、はじめて契沖といひし人の説をしり、そのよにすぐれたるほどをもしりて、此人のあらはしたる物、余材抄勢語臆断などをはじめ、其外もつき／＼にもとめ出て見けるほどに、すべて歌まなびのすぢの、よきあしきけぢめをも、やう／＼にわきまへさとりつ、

ここで宣長は契沖の学問との出会いを語る。「京に在りしほど」とは宝暦年間中（一七五一—一七六四）、宣長がこの時見た『改観抄』が写本か版本かは断定できないが、後に購入した『改観抄』は版本であり、それに自筆書入を行った本が現在も残っている。そして、その書入本でもって『百人一首』の講義を行った¹⁹。

また賀茂真淵も、『古説』の後に著した百人一首注釈書『宇比麻奈備』では、その引用を写本から版本へと変更している。つまり、宣長・真淵が支持したのは版本『改観抄』、それは版本序文に現れる「契沖」を、契沖その人として支持したということになる。また、版本『改観抄』の出版以降は、版本によって契沖説が享受されたことから、版本『改観抄』の読者全体として、このような契沖像の認識がなされてきたと考えられるのである。

すると、版本刊行後の『改観抄』読者の間に共有された契沖も、版本『改観抄』に描かれた契沖像、つまり国学の先駆としての契沖と言えるのではないだろうか。

従来、版本『改観抄』は、契沖の『改観抄』の改変として位置づけられ、版本それぞれが評価されることは少なかった。しかし以上のことを踏まえると、版本『改観抄』は契沖没後の学問である国学を「元禄五年季夏」の契沖自身に還元し、近世以降現代に至るまで共有される、国学者「契沖」のイメージを生み出した要因の一つだと考えられるのである。

*本論における『改観抄』の引用は以下の本による。

・円庵庵本『改観抄』——築島ほか編『契沖全集』第九卷（岩波書店、一九七四年）

・版本『改観抄』——鈴木淳編『百人一首改観抄—影印—』（おうふう、一九九五年）（延享五年版）

*本論における引用は、読解の便宜を図るため、適宜濁点や句読点を付した。

*本文中の傍線と記号（ア）（オ）は、全て筆者によるものである。

注

- 1 大野晋編『本居宣長全集』第一卷「玉勝間」（筑摩書房、一九六八年）、二五七頁。
- 2 河村秀根・益根編・小島憲之補注『書紀集解』首卷開題（阿部秋生執筆）（臨川書店、一九六九年）、一六三頁。
- 3 「印行の改観抄はこの樋口氏、屈景山子にはかりて校合せる所なり。写本に合せては其の功見ゆ。」（宗政五十緒校注『近世畸人伝・続近世畸人伝』（平凡社、一九七二年）。なお、本文振り仮名や注は省略した。
- 4 久松潜一『契沖伝』（至文堂、一九六九年）、宇佐美喜三八「和歌史に関する研究」『百人一首改観抄について』（若竹出版、一九五二年）、築島ほか編『契沖全集』第九卷解説「百人一首改観抄」（池田利夫執筆）（岩波書店、一九七四年）、鈴木淳編『百人一首改観抄—影印—』解説（おうふう、一九九五年）など。
- 5 以上、久松氏の説は、「百人一首改観抄の二種の刊本と内容の特

- 質」（注4久松潜一書所収）による。「契沖遺稿」は、同書によれば、東大国語研究室に所蔵されていたが、既に焼失したという。なお、久松氏は版本全体の改変者を樋口宗武と断定するが、ここには疑問が残る。確かに、樋口宗武は版本内において版本序文に続いて「百人一首改観抄序」という名の序を付すが、その内容は『改観抄』を出版する経緯である。版本の中には、樋口宗武自身が契沖序を作ったことはもちろんのこと、樋口宗武が追考を付したことを示す言葉も見当たらない。現在ではその刊行者が樋口宗武と堀景山であると目されることから、版本序文の作者を「宗武（あるいは景山か）」（注4鈴木淳編書解題）というように考えるものもある。筆者も、刊行者とされる樋口宗武と堀景山が序文作者に一番近いと推測するが、現段階では、誰の作であるか断定できないと考えている。
- 6 注4『契沖全集』解説（池田利夫執筆）。
- 7 注4久松潜一書、二九五頁。
- 8 築島ほか編『契沖全集』第一卷（岩波書店、一九七三年）、一六〇頁。ただし、精撰本は水戸家に秘され、世に流布したのは初稿本であった（築島ほか編『契沖全集』第七卷解説「万葉代匠記の性格と位置」（久松潜一執筆）（岩波書店、一九七四年））。
- 9 江戸時代に成立した古典注釈は膨大であり、その注釈史全体の動向が明らかであるとは言いがたい。そのため、本論で主に検討する春満が、版本序文に影響を与えうる人物として有力なこととは確かだが、その他の影響がないとは言いきれない。
- 10 「語孟一書を熟読精思して、聖人の意思語脈をして能く心目

- 11 「間に瞭然たらしむるときは、すなわちただ能く孔孟の意味こうもうを識るのみにあらず、……」（吉川・清水校注『伊藤仁齋 伊藤東涯』（日本思想大系）（岩波書店、一九七一年））。
- 12 「熟讀古文辞者。每有三数十路徑。瞭然乎心目間。条理不レ紊及レ讀到二下方一。数十義趣。漸次不レ用。至二於終レ篇。婦三宿一路二（北海道大学附属図書館蔵『沢文全譜』（文政八年（一八二五）刊）。なお、本文ルビは省略した）。
- 13 以上、荷田春満については、三宅清『荷田春満の古典学』第一卷（三宅清、一九八一年）による。
- 14 『万葉集童子問』の引用は、新編荷田春満全集編集委員会編『新編荷田春満全集』第五卷（おうふう、二〇〇六年）による。以下の引用もこれに同じ。
- 15 『伊勢物語童子問』の引用は、新編荷田春満全集編集委員会編『新編荷田春満全集』第七卷（おうふう、二〇〇七年）による。なお、翻刻に示される抹消・見せ消ちは、全て訂正された状態にして記した。
- 16 以下の『百人一首古説』の引用は、『賀茂真淵全集』第二二卷「百

- 人一首古説」（統群書類従完成会、一九八七年）による。また、（一）表記は小町谷照彦氏による注である。以下の引用もこれに同じ。
- 17 一〇〇首の配列とは、「右大式三位は紫式部がむすめなるをもて次におかる」（大式三位「ありま山」）や「右両人は前後又あまりに女がちなれば隔らる、心歎」（権中納言定頼「あさほらけ」）のように、和歌がなぜこの順番で配置されたかに言及する記述である。
- 18 注1書、八五頁。
- 19 以上、宣長と『改観抄』については、田中宗作「百人一首古注釈に関する一考察」（『語文』（四一）、一九七六年七月、日本国文学会）による。なお村田典嗣氏が、宣長学への契沖の影響の一つとして、古書に遡ろうとする根本的学風を挙げ、その根拠に版本序文（オ）全文を挙げるのも、宣長における版本序文の影響を認める研究の一つである（村田典嗣著、前田勉校訂『増補本居宣長』第二卷「宣長学の成立 契沖、真淵と宣長」（平凡社、二〇〇六年）。ただ、村田氏は版本『改観抄』を契沖の作と考えたため、版本序文の引用を契沖自身が宣長に与えた影響として扱うだけであった。
- （きただ ゆか・北海道大学大学院修士課程修了）